

めぐみイエス・キリスト教会

2022年8月28日(日) 第四主日礼拝
週報「通算第623号」



2022年標題聖句

第 I テモテへの手紙御6章17節～19節

《高慢にならず、頼りにならない富にではなく、むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませて下さる神に望みを置き、善を行ない、立派な行ないに富み、惜しみなく施し、喜んで分け与え、来たるべき世において立派な土台となるものを自分自身のために蓄え、まことのいのちを得るように命じなさい。》

第一礼拝(教会にて) 毎週日曜日 午前10時～11時

第二礼拝※中止

聖書の学びと祈り会 毎週水曜日 午後6時～(各家庭にて)

牧師 鈴木 竜 実
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌222「罪の深みに」 p. 336

【交読文】 No.22 詩篇第65篇 p. 896

【賛美Ⅱ】 新聖歌515「わが罪のために」 p. 819

【使徒信条】

【主の祈り】

【先週説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナル曲No.13「主をほめ讃え続けよ」

【聖書朗読】 使徒の働き19章8節～12節(新約p. 273)

【礼拝説教】 《ティラノ(ツラノ)の講堂において》

【聖餐式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌165「栄光イエスにあれ」 p. 235

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

※聖書箇所 使徒の働き19章8節～12節(新約p. 273)

19:8 パウロは会堂に入って、三か月の間大胆に語り、神の国について論じて、人々を説得しようと努めた。

19:9 しかし、ある者たちが心を頑なにしてお聞き入れず、会衆の前でこの道のことを悪く言ったので、パウロは彼らから離れ、弟子たちも退かせて、毎日ティラノの講堂で論じた。

19:10 これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主の言葉を聞いた。

19:11 神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた。

19:12 彼が身に付けていた手ぬぐいや前掛けを、持って行って病人たちに当てると、病気が去り、悪霊も出て行くほどであった。

●ポイント1.「ティラノ(ツラノ)の講堂」とは？

■ツラノ([ギ]Turannos)パウロは第3回伝道旅行でエペソに来た時、初めユダヤ人の会堂で教えたが、反対にあい、獲得した弟子たちと共に場所をツラノの講堂に移して活動を続けた。「講堂」と訳されているスコレーは、学ぶ場所にも学ぶ集団にも用いられる言葉であるが、ここでは前者である。2年間パウロはここで論じ「アジアに住む者はみな、ユダヤ人もギリシヤ人も主の言葉を聞いた」とあるから、広く開放された場所であったと思われる。ツラノという人物については、確かなことは分っていないが、講堂の創設者、所有者、あるいは、この講堂で講じていた著名な教師の名であったかも知れない。西方本文は、「第5時(午前11時)から第10時(午後4時)まで」を加えている。ツラノ自身もしくは他の教師が講義を終えた時間に、早朝の天幕作りを終えたパウロがやってきて、福音を講じたということかもしれない。

●ポイント2.「主が与えて下された同労者」とは？

※使徒の働き18章2節～3節「首都コリントにおいて」(新約p.271下段)

18:2 そこで、ポントス生まれでアキラという名のユダヤ人と、彼の妻プリスキラに出会った。クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じたので、最近イタリアから来ていたのである。パウロは二人のところに行き、

18:3 自分も同業者であったので、その家に住んで一緒に仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。

●ポイント3.「使徒パウロによる奇跡としるし」とは？

※第 I コリント2章4節「使徒パウロの証しから」 (新約p.328上段)

2:4 そして、私の言葉と私の宣教は、説得力のある知恵の言葉によるものではなく、御霊と御力の現われによるものでした。

※第 I コリント4章20節「神の国とは」 (新約p.332上段)

4:20 神の国は、言葉ではなく力にあるのです。

◎先週の礼拝メッセージ【エペソでの十二人の弟子】

《パウロは、船を使わず内陸を通り、自身が預言したように、再びエペソにやって来ました。そしてそこで何人かの弟子にあったのです。

彼らは、第二回伝道旅行の時に、パウロが導いた者ではなく、アポロによって導かれた者たちでした。そこで、パウロは質問します。

「信じたとき、聖霊を受けましたか」

「いいえ、聖霊がおられるのかどうか、聞いたこともありません」

「それでは、どのようなバプテスマを受けたのですか」

「ヨハネのバプテスマです」

『ヨハネのバプテスマ』とは、この時から20数年前にエルサレム郊外において、ヨハネが授けていた『罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマ』のことです。おそらくアポロは、ヨハネ本人からバプテスマを受けたに違いありません。これは、福音を受けるには、悔い改めが先決であり、必要であると言うことです。「悔い改め」とは、自分自身が罪人であることを認めることです。罪がわからなければ、主イエスの十字架の恩恵が分からないからです。さて、そこでパウロは彼らに言います。

「ヨハネは、自分の後に来られる方、すなわちイエスを信じるように人々に告げ、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」と。

そして、これを聞いた彼らは、主イエスの名によって、バプテスマを受けます。それから、パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が彼らに臨み、彼らは異言を語ったり、預言したりしたのです。この時、ペンテコステの日に起こったことが、エペソにおいても再現されたのです。

聖霊を授かったのは、全員で十二人ということでした。主は、この十二人の弟子たちを、エペソ教会における重要な弟子として用いられたのではないのでしょうか。エペソ教会は一世紀末から二世紀初頭にかけて、キリスト教の中心的教会として重んじられたのです。その土台信者として、彼らが選ばれたことは、十分察し出来るからです。》

お知らせ

※9月4日(日)の第一主日礼拝は、通常通り午前10時からとなります。